

平成17年度「TAを活用した授業」報告

全学共通教育推進機構では、平成17年度に「TAがまだ導入されていない授業におけるTAの活用方法のモデルづくりを目的として、希望する専任教員の協力の下、試験的にTAを配置し、その効果を検証する」ことを目的に、各学部・外国語教育研究機構に対して「TAを活用した授業」の公募をおこなった。その結果、春学期に16、さらに秋学期に20の授業科目を選定し、主に本学大学院生の協力のもと、標記授業が実施された。

すでに昨年10月19日開催の第9回FDフォーラムにおいて春学期の3名の担任者から直接ご報告いただいているが、今回あらためて授業を担当された3名の先生にTAを活用しての効果や問題点について、報告文を寄せていただいた。



受講生とTAの評価を受けながら

孝忠 延夫

今回、「TAを用いた授業」に応募したことをきっかけに、かなり以前のことを思い出した。

1986年4月から在外研究の機会を与えられ、ロンドン大学で過ごすこととなった。同僚から研究の間にロンドン大学教育研究所に行って資料などを持って帰って欲しいと頼まれたのだが、まさか研究の本拠IALS (Institute of Advanced Legal Studies) と同じ建物にあるとは思わなかった。このころはまだFDとは言っていなかったように記憶するが、日本においても高等教育における教育方法論などの論議が始まったこともあり、法学部でも若手・中堅教員（もちろん、私は「若手」）が中心となって「法学教育研究会」と称して、法学部における教育のあり方、導入教育の内容などを話し合っていたのである。

さて、2005年度は、諸般の事情から通常は4人の専任教員で担当する各種「憲法」の講義を2人で担当せざるを得ない状況となったので、「憲法Ⅰ・Ⅱ」の講義だけでも総計1000人を超える受講者を担当することとなった。まさに「猫の手も借りたい」気分であった。

しかし、今回、TAには博士後期課程の学生を選んだこともあり、何を（内容）、どのように（方法）アシストしてもらうのかかなり考えた。結論として、レポート提出状況管理、データ入力、授業環境設定（パワーポイントなど）に加えて、「研究者の卵」であり、かつ「大学教育担当者予科生」にふさわしい内容のものとして、小テスト解説、論点解説

のために毎講義時ではないが、一定の時間を与えてみることにした。

率直に言って、とても心配であった。が、20年以上も前に、私がどんな講義をしていたのかを想像すると、何も言えなくなってしまいそうである。受講生への評価に加えて、同僚評価として授業公開も試みられているが、「研究者の卵」が常時「監視・注視」しているなかでの1年間の講義は、なかなか疲れるものではあった。

（法学部教授）

「授業の充実」と「TAへの指導」をコンセプトに

入子 文子

「米文学史」で行った1年間のTA活用授業のコンセプトは(1)多人数授業における時間の無駄をなくし、授業を充実させる(2)TAに対する指導、の2点にあった。このコンセプトに沿って次の方法で授業を行った。

第1の、授業の充実のためのTAの役割は、①教室に於ける資料の配付——教科書とは別に、講義に即した英文資料や図をほとんど毎週配布する、②教室に於けるイエス・ノー・クイズの回収と整理——定期的に課題図書を与え、内容チェックのためのイエス・ノー・クイズを実施している、③回収したクイズを教師が用意した回答に基づき採点、記帳——定期試験も実施するが、それとは別にクイズの合計点で普段点を付けている、④視聴覚教材使用時の機器準備と後始末——時々映画やビデオを見せるため、⑤視聴覚教材使用時の学生達によるコメント

の回収——フィルムを漫然と見ることのないようにコメント提出を義務づけている。

第2の、TAに対する指導は、①教師が作成したクイズの課題作品をTAも読んでおいて採点する、②TAも授業に参加し、教師のノー・ハウを把握し、将来の参考にする、③クイズ作成の練習として、学生達に与えた課題作品をTAも読み、問題を作成し、教師が点検する。ただし、半期を通じて1回に限定する、④クイズの実施の練習として、TAが作成したクイズをTAが教壇に立って読み上げ、学生達の回答を採点、記帳する、⑤視聴覚教材による授業にTAも参加。教師が出題し、学生が回答したコメントを、採点し、記帳する。

以上のようにTA活用授業を展開した結果として、①これまで出席点を重視するために教師一人でやっていた作業をTAが肩代わりしたことで、出席点と平常点を確実につけることができ、まじめな学生を正当に評価しやすくなった、②また資料配布と回収に手を取られないので、教師は授業時間を有効に用いることができた、③TAが教室にいることで、学生が気軽に質問できるようになった。特に大学院についての質問があり、大学院を知る一つの機会を提供できた、④TAが授業に参加することで、TA自身の知識の深まりと知識の整理ができた、⑤TAがクイズを試作する機会を半期に一度だけ持つことで、TAが責任を持って主体的に学生に関わることができた。

TAの学生は博士後期課程2年のアメリカ文学専攻学生で、研究者を目指しているため極めて真摯に、しかも楽しみながら、几帳面に仕事を処理した。この経験が業績の一環となり、将来に役立てば何よりである。

(文学部教授)

大人数講義にTA・SAの拡充を

喜多 千草

私の担当する『情報社会論』は総合情報学部のコア・カリキュラムのひとつに位置づけられた必修科目となっています。1年次配当科目で春学期・秋学期に分かれて全員が履修するため、300人から350人の大規模授業となります。ご存知のように総合情報学部は文理融合型の教育を行っており、学生が興味を持つ分野や基礎知識のありようにはかなり幅があります。こうした状況下ではありますが、『情報社会論』では「情報社会」という概念の妥当性そのものについて考察したり、ひとつの問題についてさ

まざまな学問分野からどのようなアプローチがあるかを知り自分の興味関心にあった思考方法を探ったりするということが必要です。つまり、あるスキルをマスターするといった教育内容ではなく、学生自らが考察することが求められるを得ないのです。これを大規模な授業で行うには、おのずと限界があります。そこで、TA活用のモデルケースに応募した次第です。

2005年度春学期、秋学期と連続してTA活用授業を行いました。そこでTAに担当してもらったのは、出席管理、授業内提出物の整理、授業内ディスカッションの促進などでした。また、授業内の私語を抑制する「黄色帽子制度」の運用もお願いしました。この「黄色帽子」制度は、私語のあった学生にイエローカードである「黄色帽子」をわたし、さらに私語が続いた場合「赤色帽子」(減点あり)を出すというものです。これを教員一人が運用していたときは、広い教室を走り回ることになったり、渡した本人が“冤罪”を訴えたりで、なかなか大変だったのですが、TAに帽子の運用を任せてから大変スムーズに運用ができるようになりました。ただし、春学期と秋学期でTAが交代した結果、その効果にはかなり違いが見られました(秋学期のTAは、厳しく帽子を渡すことができず、あまり抑止効果につながらなかったのです)。

2006年度は、再度一人で授業を行うようにしましたが、TA活用授業に際して増やしたきめ細やかな対応を続行しようとしているため、かなり大変です。私が強く望むことは、やはり一定規模以上の講義には、出席管理、簡単な質問事項への応答、授業内課題の回収、資料配布などを補助するSAをつけるということです。さらに、内容に関わることで言えば、たとえば『情報社会論』の場合、予習課題としてインフォメーションシステムのアンケート機能をつかった400字の記述式課題、授業内の演習問題、授業後のウェブディスカッションの三つの課題を行っており、さらにレポートの提出も添削指導して返却しています。これを一人で行っているとかなりの負担ですが、学生自らの知的背景に沿った考察を促すためには必要と考えています。こうした指導にTA補助が加えられれば、より丁寧な指導ができるのではないかと考えています。今後、学生の個別のニーズに対応した大規模授業を行うために、TAやSAの補助を拡充していただければと思います。TA活用授業を通して、そのような感想を持ちました。

(総合情報学部助教授)